嶺学・時田純・季羽倭文子編著
『高齢者の在宅ターミナルケア
——その人らしく生きることを支える』

評者：広井　良典

「ターミナルケア」ということが日本で言われる時，これまで念頭に置かれていたのはほぼもっぱら「がんのターミナルケア」を中心とする話題であり，（がんに限らない）高齢者のターミナルケアということが正面から主題化されることは少なかった。けれども高齢化の急速な進展の中で，現在大きく浮上しているのは高齢者のターミナルケアをめぐる課題である。

本書は，こうして最近大きな関心が向けられるようになっている新しいテーマについて，関連領域の専門家が行ってきた研究会の成果をベースに，それを発展させる形でまとめられたものである。高齢者のターミナルケアを考えていく際の基本論から始まり，尊厳死，老人病院・老人ホームなど施設でのターミナルケア，在宅ホスピスないし在宅ターミナルケア，家族への支援など，高齢者のターミナルケアをめぐる課題と展望が，最新の知見や統計調査，具体的な臨床実践等をもとに多様な観点から包括的に論じられており，このテーマに関する日本の現状についての，現時点でのひとつの総括ともいえる充実した内容となっている。おそらく今後このテーマに関し，様々なところで参照される文献になると思われる。

ここで，本書で扱われている話題について若干個人的な感慨を記すことをお許しいただきたい。本書でも幾度かにわたり言及されている内容であるが，評者らは1997年に『福祉のターミナルケア』と題する調査報告書をまとめた（（財）長寿社会開発センター）。これは，高齢化が着実に進展していき，また特に80歳以上の「後期高齢者」の死亡が急増する時代を迎える中で，今後は“長期にわたる介護の延長線上に死の看取りがある”ような姿のターミナルケアが増加していくという認識に立って，これからは狭義の医療的なケアのみならず介護等を含めた「福祉」の側からのターミナルケアへの関わりが非常に重要となっていく，という方向を論じたものだった。このことは同時に「死亡場所」の変化を意味し，人の死ぬ場所が現在のように圧倒的に「病院」中心の時代から，一方で在宅，他方で特養やグループホームなど（広義の）福祉施設に大きく広がっていくことが予想される。同報告書はこうした変化を「死に場所の選択の拡大と多様化」と呼び，そうした方向を支援するための政策やサポート体制の大幅な充実が必要であることを指摘した。

本書の内容とまさに重なってくる点であるが，高齢者のターミナルケアをめぐる状況や死に場所のあり方は，当時から現在までの６年ほどの間に，同報告書で指摘したような方向に——ある意味で予想よりずっと速いスピードで——変化してきたといえる。たとえば，報告書でまとめた特養ホームにおけるターミナルケアへの取り組みは，当時は約32％の特養が「ターミナルケアを実施している」と答えるにとどまっていたが（1996年末時点），最近の調査では７割近くの特養が何らかの形でターミナルケアに取り組むに至っている（「特養ホームを良くする市民の会」による実態調査）。また，報告書当時では「グループホームにおけるターミナル

ケア」といった話題は現実のものとしてはほとんど考えられなかったが，グループホームそのものの数がここ数年で急激に増加する中で，グループホームでの看取りという事実や課題は広く認識されるようになっている。こうした動きを反映して，たとえば昨年（2002年）12月には「特養ホームを良くする市民の会」主催による「特養ホームを終のすみかに」と題するシンポジウムが行われ，また筆者が知る範囲でも，グループホームでのターミナルケアへの取り組みに関する調査や介護保険施設におけるターミナルケアの体制作りといったテーマについての提言等の試みが行われるようになっている。

こうした変化や動きに照らしたとき，本書の中で示されている様々な知見や，多様な臨床現場の実践を踏まえた具体的な課題の指摘の貴重さがあらためて浮かび上がってくる。特に，老人病院，介護療養型医療施設，老人福祉施設，在宅ホスピスないし在宅ターミナルケア，訪問看護ステーションなど，医療と福祉にまたがる幅広い観点からこのテーマについてのアプローチがなされていることが本書のもつ大きな意義といえる。なぜなら高齢者のターミナルケアほど，「医療―福祉」，「施設―在宅」といった垣根をこえた対応が求められる領域は少ないからである。また，本書の副題である「その人らしく生きることを支える」という視点に立った場合，本書が中心的に取り上げている在宅ターミナルケアは特に重要な意義をもつ。

以上のような本書の価値を十分に確認した上で，筆者から見て，本書の内容を踏まえつつさらに今後深化させていくべき課題ないしテーマと思われることを以下に記してみたい。

第一は，高齢者のターミナルケアそして高齢者の死のプロセスそのものについての，医学・生物学・心理学・社会学・人類学等々を含む学際的な研究や知見の深化が強く求められているという点である。本書は，どちらかというと様々な臨床現場での具体的な現状の記述や課題の摘出にアクセントが置かれる形でまとめられており，「高齢者のターミナルケア」についての経験的な知見の蓄積や現状把握そのものが十分に行われてこなかった日本の現状を踏まえれば，そうした作業は今まさにもっとも求められているものである。ただ同時に，そうした議論と並行して，高齢者の死のプロセスあるいは死そのものについての，いわば理論的ともいうべき研究や認識の深化が求められているのではなかろうか。

近代科学あるいはそれを基礎とする現代の医学は，人が「病気によって死ぬ」ことについては多くの知見を蓄積してきているが，人が十分に「老いて死ぬ」場合の，その過程については確立した知見を十分もっていない。実際，しばしば医療関係者は“老衰”による死ということを認めたがらないし――何らかの「病名」をつけなければ納得しない――，「天寿を全うする」とか「自然な死」といった表現には強い抵抗が示される。けれどもこうした見解は，病気や人間ひいては死というものについての，ある特定の（近代科学的な）枠組みから派生するものではなかろうか。生物あるいは生命にとって死そのものが自然の過程の一部なのだとすれば，“十分に生きて老いて死ぬ”“天寿を全うする”ということは，むしろあって当然の，本来の死のかたちなのではないだろうか。

本書の中でこうしたテーマについて正面から論じているのは神奈川県の特別養護老人ホームでターミナルケアに関わってこられた時田純氏である（第６章）。本書でも同様の趣意のことを述べられているが，上述の特養での看取りに関するシンポジウムで氏が述べられていた次のような内容が印象に残った。氏は，これまでに多くの高齢者を看送った経験から，「人の老い

ていく過程は細胞が死になじんでいく過程であり，その過程を自然にサポートすることが大切で，天寿を全うした死には痛みは伴わないのではないか。天寿を全うするためには①その人がより良く生きる，②どこで誰に看取られるか，③体と心の癒しがあること」が重要という趣旨のことを述べられた。

こうした理解については様々な議論がありうると思われるが，求められるのは，こうした経験知の蓄積を踏まえながら後期高齢者などの死のプロセスについての本格的な学際的な研究が進められていくことではなかろうか。そしてこうしたテーマは，世界でもっとも長い平均寿命（及びＷＨＯの定義する健康寿命）をもち，しかも（イタリアやスペインとともに）高齢化の先頭を走っていく日本にとってもっともふさわしい課題と考えられる。

本書の成果をベースにさらに深化されていくべき第二の課題として，私たち一人ひとりにとっての「死生観」の再構築ということを指摘したい。これについてここで詳細に論じることはできないが，最終的にはこの点がターミナルケアの実践においてももっとも大きな基盤となるものと筆者自身は考えている。ここで，しばしば「日本人はあまり死について考えたりしない民族だ」といった言い方がなされることがあるが，これは大きな誤りである。「死＝単なる無」といった見方が支配的になったのは戦後の高度成長期のことであり，日本人はむしろ死について親しく考え思いをはせてきた長い歴史がある（これは日本以外のどの文化や地域においても共通のことである）。私自身は，ターミナルケアにおいてもっとも重要な意味をもつのは，その人にとっての「たましいの帰っていく場所」とでも呼べるものを見つけていくことではないかと考えている。

こうした死生観については，実は相当な「世代差」があることにも留意しなければならない。たとえば一口に「高齢者」といっても，現在すでに70歳代以上であるような方々の世代（比較的伝統的な死生観を保持している世代）と，これから高齢期を迎えることになるいわゆる「団塊の世代」前後の世代（高度経済成長の真っ只中を生き，“上昇的”な人生観の強い世代）とでは大きな違いがあるし，さらに現在の若い世代まで含めると，ある意味で現在の日本ほど，死生観や生きてきた時代の価値観が世代によって大きく異なる社会は珍しいといえるほどである。言うまでもなく，そうした死生観をどのような形でもっていくかはひとえに各個人にゆだねられているが，こうした点まで視野に入れながら，ターミナルケアについての議論を深化させていくことが，本書が提示している主題を受けてなされるべき対応のひとつと思われる。

（嶺学・時田純・季羽倭文子編著『高齢者の在宅ターミナルケアーその人らしく生きることを支える』御茶の水書房，2002年６月刊，v＋321頁，定価3,800円＋税）

（ひろい・よしのり　千葉大学法経学部教授）